

異文化としての歴史

ほくは、経済史概論と西洋経済史という科目を担当しています。これらの科目の大きな魅力のひとつは、異文化を対象としていることにあります。講義では、ヨーロッパ、アメリカ、アジアといった相互に文化的に異なる社会の経済をとりあげて、比較しながらそれぞれの歴史的な特徴を検討しています。また、歴史の講義ですから、自分が生きた経験のない時代を対象としているという点でも、異文化世界を勉強することになります。

異文化を知ることには、好奇心をそそられながら経験を豊富にするという面白さがあります。また、先入観や偏見を捨てて、いったん自分とは異なるものを自分のなかに受け容れてみるのが求められますから、自分自身を相対化して、自分の受け皿を大きくすることにつながると思います。

ただ、今日のようにグローバル化が急速に展開する世界では、様々なものが標準化されていく傾向にあるので、経済学の勉強においても、世界で通用するような標準的な経済理論を身につける必要があることは確かです。現代世界において中心的な位置にあるアメリカで発達した経済学は、世界全体に対して大きな影響力を持っており、これを無視することはできないと思います。

けれども、グローバル化の進展によってあらゆるものが標準化されるかといえばそうではなく、他方では、従来にもまして、文化的な差異とか地域の個性に対するこだわりが強まっているのも事実です。標準化と差異化のせめぎあい、歴史のなかで繰り返されてきたことであり、それを学ぶことを通じて、原理主義に陥らないバランス感覚を身につけていきたいというのが、講義のねらいのひとつです。



■経済史概論Ⅰ・Ⅱ
■西洋経済史Ⅱ

唐澤 達之
(からさわ たつゆき)

研究テーマは、イギリス都市史。好きなものは、ジャズ。最近お気に入りのミュージシャンは、ロイ・ハーグローヴとカサンドラ・ウィルソン。聴くのが専門になっているけど、気に入った曲はたまに自分でやってみることも。